

Member's Forum

会員投稿の頁



U-35委員会企画 talk baton 20 活動報告

talk baton とは…

若手プラットフォームづくりの活動の一環として、建築を取り巻く他分野のゲストがトークのバトンを繋げていくコミュニケーショントークイベントです。

建築をフィールドとする私たちと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていきます。

U-35委員会Facebookページ

活動内容やメンバーの雑感などざっくばらんに情報をアップしています。ぜひ一度お立ち寄りください。

<https://www.facebook.com/U35.aaj>



出発前の集合写真



京阪の天満橋駅に隣接した『八軒家浜船着場』に停留している小さな遊覧船『御舟かもめ』。今回のトークバトンは「建築と舟」をテーマに実際に大阪の水辺空間を案内してもらいながら、フリートークを交えて行った。U-35委員会でも7th Action『建築と水辺』で中之島にてイベントを行った。今回、実際に大阪の水辺空間の魅力を伝え続けてきた二人に生の声を聞くことで、大阪の水辺空間の実情を深掘していきたいと考えた。

■八軒家浜から寝屋川へ（開業までの経緯）

吉崎「今回参加しているメンバーは遊覧船の経験が無い人が多いと聞いているので、まずはガイドをあまりせず波と風、大阪の水辺の風景を感じてほしいと思います。」

船着場から小さな遊覧船は波に揺られながら北上し、寝屋川方面に向かう。まずは、各々のメンバーは写真を撮るなど水上を楽しんだ。吉崎「潮位の高さは護岸のブロックの見えている数を確認して、どの橋の下をくぐるかを判断しています。かもめの舟は水面から1500の高さになるように設計していますが、一日の中で低い橋をくぐるコースの運航ができるのは半分程度です。」

吉崎「昔から大川から淀川に出ることで京都まで舟で行くことができます。現在、かもめでも枚方まで行くことができます。」



水上の波と風を感じる気持ちのいい舟上

一日の営業時間は、天気にも左右されるものになる。

吉崎「22歳の時に所属する建築設計事務所のメンバーと共に水辺の物件を専門に扱う『水辺不動産』を立ち上げたことが、大阪の水辺との最初の関わりでした。その頃から小さな舟を購入して乗っていたことが、今の遊覧船に繋がっています。」

質問者「営業時間外はどこに停留しているのですか。」

吉崎「毛馬開門に営業船を停留できる場所があります。10年前には停留できる場所が無く、大阪府に要望し続けました。」

2001年内閣官房都市再生本部から都市再生プロジェクトとして『水都大阪』がスタートし、2009年には『水都大阪フェス』が開催され、市民への認知度も上がっていった。同時に小さな民間事業者にも徐々に水辺空間が開かれるようになったと感じる。

■寝屋川から大川へ（様々な取組への挑戦）

質問者「遊覧船と飲食ができる屋形船は同じ営業形態になるのですか。」

吉崎「保健所の基準をクリアできれば遊覧船でも調理は可能です。ただ、かもめでは当時小さな遊覧船で許可を出した前例がないことから、保健所の許可が下りなかったため調理済みの料理のみ提供しています。」

吉崎「夏には『OSAKA BOTEL』というイベントを行っており、舟の上で朝を迎えることができます。これも宿泊の許可を取ることが難しいため、夜走行し続けることで解決しています。大阪のビル群の灯が消えるのを見た後、大阪湾の工場地帯では荷物の積荷が始まり、朝方には中央卸売市場で寿司を食べ解散するプランですが、女性に人気があります。」

吉崎「冬には舟上にこたつを設置し、焼きもちを食べるイベントなども行っています。」

行政の判断ができないような時代から先進的に取り組んでいることから、苦勞も多いが工



普段は見ることができない橋の裏

夫をしながら様々なイベントに積極的に取り組んできたことが伺える。

■大川から堂島川へ（橋から見る大阪の歴史）

吉崎「堂島川は古い橋も多く、橋の高さも低いです。難波橋は大正4年に架けられ、昭和49年に鉄部が架け替えられています。水晶橋は元々可動橋で水門のような役割を持っていたため、監視部屋が橋の下に今でも残っています。」

吉崎「近年の橋は水晶橋や大江橋のような重厚な迫力のあるデザインは少なく、合理的なものが増えてきています。本町橋は現役の橋で一番古い橋ですが、川から見られることを意識したデザインになっています。」

普段橋を歩いて渡っているときには気づけない橋のデザインや魅力が、そこには多くあった。やはり大阪の水辺空間を語る上では川からの視点は大切な要素の一つとなる。

■堂島川から東横堀川へ（川のローカル性）

吉崎「道路と一緒に全国共通で川の運行上のルールを示した看板があり、信号機が付いている場所もあります。一方で大型船と小型船で橋脚のどこを通るかが決まっているようなローカルなルールも存在しています。」

吉崎「東横堀川には水位調整の水門が設置されており、様々な舟が申請をすれば航行可能です。」

（ここで案内役を吉崎氏から中野氏に交代）

中野「ここから東横堀川に入ります。大阪城の外堀にあたる川で、武家町と商家町の境目になります。川の上に高速道路が通る景観は世間的には嫌われる傾向にありますが、高速道路の列柱が並ぶ景色は愛好家には好まれる面もあります。」

中野「先日本町橋の近くに『β本町橋』という商業施設が完成しました。河川沿いは通常規制が厳しく新しい施設を建設することが難しいのですが、大阪では規制の緩和を積極的に行っています。今回の終着点である『タグ

ボート大正』は民間都市再生整備事業計画として、大阪府の所有の河川敷地を大正区が借地し、民間事業者へ転貸しています。」

中野「先ほど通った水門ができたのは20年前ですが、それから『水都大阪』の政策として道頓堀の整備が本格的に始まりました。水門によって水辺に開けた都市構造が復活しつつあります。将来的には川沿いのコンクリート壁も撤去できるようになることを望んでいます。」

大阪の川はローカルなルールによって保たれている秩序がある一方で、排他的になりすぎることによる新規参入の難しさも同時にある。また、大阪では河川規制を緩和する動きによる民間事業者の参入を活発にして、水辺空間の賑わいの創出を計画しているようである。

■道頓堀から大正へ（今後の大阪の水辺空間）

中野「大阪の川の歴史は物流を中心に栄えてきました。今でも物流は多く、時代の流れに応じてレクリエーションとして水上遊びが流行った時代もありました。『水都大阪』以降水上での観光ビジネスの機運が高まっていますが、現在はコロナの影響もあり、下火になっています。」

中野「民間事業者が水上で活動を行いたい場合は規制が多いため、行政との事前の調整を行います。結局それぞれが似た政策や取り組みを行ってしまう傾向があります。民間事業者でできることと行政でしかできないことの住み分けをしっかりと行うことが大切になります。」

中野「また今後大阪万博も予定されており、水上利用についても多くの議論がなされています。アフターコロナの大阪の水辺空間の賑わいを取り戻す上でも民間事業者の積極的な参入は必要と考えており、ローカルルールの平準化や周知していくことが重要になっていくと考えています。」

中野「大阪の川沿いは悪いイメージが先行し

ていた時代もあったため、川に対して閉じた建物も多かったが、『水都大阪』以降川に対してのブランドイメージもでき、開かれた建物も増えてきています。我々が行っているソフト面でのまちの活動だけでなく、景観的な面でもまちの変化を期待したいです。」

コロナ禍により大きなダメージを受けた大阪の観光業だが、小さな舟だからできるお客様一人一人のニーズに応えたサービスを提供し続けることで、一人でも多くの方に水上の魅力を伝えようとしている。御舟かもめの存在が我々と大阪の水辺空間の距離を縮める渡し舟となり、『水都大阪』を世界に誇れる都市として広めてくれる渡し舟のような役割を担ってくれと感じた。

普段、建築設計では建物が建つことがない、水上という場所も大阪では都市形成上重要な要素の一つであり、そこでの営みや活動を今後も注視し設計活動にも活かしていきたい。

（文責：粉川）



talk baton 20 を終えて

7th Acitonの延長として、実際に生活の生業として舟業を営む御舟かもめの二人の話の聞いたことで様々な側面から大阪の水辺空間を深掘りできた。また、普段大阪で暮らしている中で日常的に触れている水辺空間も一歩水上に出るだけで非日常の体験へと変化する。都市空間の見方の変化によって新たな体験となることを改めて実感することができた。

対 談 日：2021.08.28
場 所：御舟かもめ舟上
（大阪市北区～大正区）
モデレーター：粉川 壮一郎
（安井建築設計事務所）

